

Title	聖学院大学のアイデンティティ：二十世紀末にあって第三ミレニアムを展望しつつ
Author(s)	大木, 英夫
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume14, 1999.12：7-21
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3200
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

聖学院大学のアンデンティティ

——二十世紀末にあつて第三ミレニアムを展望しつつ——

大木英夫

1 大学審議会の中間報告

一、「二十一世紀の大学像と今後の改革方策について」という主題のもとに、平成九年十月三十一日文部大臣より大学審議会への諮問として、(一) 大学院制度の改革、(二) 学部段階の改革、(三) 大学の組織運営システムの改革について、総合的に調査審議することが要請された。その『中間まとめ』が平成十年六月三十日に発表された。そこで求められていることは、今日の流行語を借りれば大学のリストラである。「様々な意味において透明な時代であるとされる二十一世紀において、大学が求められる役割を十分に果たし、国際的にも評価されるようになるために」大学を改革して行かなければならないというものである。『中間まとめ』に指摘されている事柄は大いに参考になる。しかし、そこに新しい時代における大学の文化的使命についてのいわゆるフィロソフィーが欠落しているという所感を讀むものに残す。

二、『中間まとめ』はこう述べる。「これまで大学改革のために大きな努力が払われてきたが、改めて、大学の変化に対する社会の要請はそれよりも遥かに大きいことを自覚しなければならない。大学関係者は、大学に対する

社会の側からの様々な批判は未だ完全に払拭されてはいないという現状を重く受け止め、来るべき二十一世紀において大学に期待される役割を果たしていくことができるよう、更に積極的な改革を推進していく必要がある」(一)。大学の現状と社会の要請との間のギャップを認め、「更に積極的な改革」が求められる。この場合、この改革は、部分的改修ですむかという問題がある。「中間まとめ」は、「多くの大学教員の意識は、従来の大学教育の概念から抜け切れていない」と指摘している。この意識と状況との〈ズレ〉をどうして解決するか。問題は、この〈ズレ〉は、大学そのものと社会状況との間の〈ズレ〉の反映というところがあるということである。だから、その根本的な解決は、日本の今日の状況をどうとらえるか、そしてその状況から外れてきた大学をどう reallocate するか、ということを考えることを要求する。したがって「更に積極的な改革」とは、この大きく変化しつつある状況をはつきりと認識し、そしてそれと取り組む態勢を整え、そのようにして「来るべき二十一世紀において大学に期待される役割を果たす」ようになることではなければならない。

2 日本の状況の認識をめぐって——ハンチントンの『文明の衝突』の意味

三、一体今日の日本の状況はどうなっているのか。最近ハンチントンの『文明の衝突』という本が話題となっている。それをてがかりとして、この問題を取り扱ってみる。今年の一月三日夜十一時、NHK第一チャンネルのスーパー・トークという番組で、高島肇久と山内昌之両氏が相手となって、ハンチントンを囲んだ座談会、というよりは質疑応答のような番組があった。残念ながら、スーパー・トークというよりは、スーパーフィシャル・トークになった。それは日本のジャーナリストも歴史の教授も、ついに問題の核心に切り込んで行けなかったからである。

それは、日本の知性の弱さを暴露したケースでもある。深く自らを切るその自己批判の深さなしに、外国の学者と太刀打ちできるものではない。それが欠落しているからである。なぜハンチントンの書を取りあげるか。それは、この書が、日本の状況をするどくえぐり出したからである。状況は、得てして内からよりは、外からよく見えるものである。彼は宇宙船に乗って地球を見るように、世界の至る所を視野に収めている。その中で、日本について、彼はこう言った。「最も重要な孤立国は、日本である。日本の独特な文化を共有する国はなく、他国に移民した日本人はその国で重要な意味をもつほど人口が多くはないし、かといって移民先の文化に同化することもない。(たとえば日系アメリカ人がそうだ)。日本の孤立の度がさらに高まるには、日本文化は高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教(キリスト教やイスラム教)やイデオロギー(自由主義や共産主義)をともなわないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーをもたないために、他の社会にそれを伝えてその社会の人びとと文化的な関係を築くことができないのである」(二〇四)。この「孤立」のイメージには、積極的意味はない。第二次大戦中日本が世界に孤立し、世界の袋叩きにあつたことは、なお記憶にまなましい。それから五十年してふたたびこの「孤立」のイメージが戻ってくる。

四、一九九三年に『フォーリン・アフェアーズ』に発表された彼の論文が『中央公論』に翻訳掲載されたとき、それを読んで、わたしは、少なからずこの見方の影響に危惧を覚えた。ちょうどそのころ、「ミスター円」と呼ばれる大蔵官僚、榊原英資氏は、一種の文化多元主義を楯としてアメリカ支配に反対し、日本の立場を盛んに主張していたころであつた。このような主張は、石原慎太郎の「ノーと言える日本」というような書物によって、当時の日本主義による後方支援を受けていた。しかし、榊原氏の議論は、いわばシロウト勉強、学問的には訓練を經ていない細腕の仕事であつた。それに対してハンチントンのこの論文は、さらに豊富な材料を駆使した強力な文化多元

主義をもつて、ぎやくねじを食わせたことになることを感じた。日本の独自性の主張は、日本の「異質性」として逆襲される。当時はウォルフレンのようなリヴィジヨニストの日本官僚批判も激しくなっていた。大蔵官僚のナイーブな日本主義は昔の軍閥の日本主義のあやまりを繰り返して、日本をあらたな孤立に追い込む危険を感じた。そのとおりになってきた。日本は、G7で、「共通の文化価値をもつ」国として承認を求め続けてきた。しかし、ハンチントンのこの書は、日本をその仲間として承認しないことを公然と主張したことを意味するものであった。このことを理解できないこの大蔵官僚の姿は、昔の大本營の参謀の傲慢さに類似していた。戦争中は、軍人によって、日本は孤立化し、最近、大蔵官僚によって、日本はまたもや孤立化するのである。

五、もしこれが日本の状況であるならば、それとの関係で大学はどう対処すべきか。問題は、この日本の孤立状況が戦後五十年にしてどうしてできてきたか、ということである。それは一九四五年の敗戦で悲惨な破滅を経験したのではないか。それは自然発生的なものであろうか。それとも歴史的に形成されたものであろうか。もしそれが歴史的に形成されたものであるならば、それに教育が関わっており、またとくに大学教育が関わっていることを認めざるを得ないのである。もし大学がある普遍性を追求するのであれば、もつともすぐれた大学教育を受けた人間は、外国人にこのような仕方では捉えられることを不可能ならしめるのではないか。しかし、日本の場合そうではないのである。近代日本の孤立性とは、日本人の国民性という自然的な特性によるよりも、むしろ明治以降の「和魂洋才」という文化形成の嚮導理念によって導かれた日本近代化の近代文化形成の結果なのである。それは教育行政や具体的な教育の欠陥がもたらした人為的ミスである。そしてとくにそれが、その「欠陥」ある教育にもつとも適合した部分、つまり、エリート、大蔵省の榊原財務官のようなエリート官僚にあらわれ、対外的に代表されているのである。日本人にとってこの「欠陥」は見えない。それは内側から見ればそのような仕方では社会的に上昇して行く

のがよいと肯定されているからである。内からみてよいというものが、外から見て問題となる、このギャップが日本のかつての不幸と悲惨の原因であつたし、今もそうなのである。特殊なままでやって行けるならば、それでよい。しかし、世界がお互いに結びつき、グローバルゼーションが不可避であるならば、日本は行き詰まる。ここにわれわれは、今日の大学教育が取り組むべき重大な問題が潜んでいるのを見るのである。

六、ハンチントンは日本の近代化の「特殊」性を正確に認識している。しかし、それを日本の官僚や知識人が肯定的に評価しているように肯定してはいない。ハンチントンが描く〈日本像〉は、日本の国際的地位に損害を与えらるものである。そのような仕方では日本が世界に孤立していることが、日本の将来を不透明にする、暗くする、閉塞的にする。ハンチントンは、日本の将来についてこう予言した。「経済統合が文化の共有のいかに左右されるものならば、文化的に孤立している日本は、今後は経済的にも孤立していくかもしれない」(二〇一)。一体このような孤立の状況が、敗戦後五十年してなお残っているのはどういうことか。ハンチントンのこの〈日本像〉において、日本の近代教育がすべて「裏目」に出ていることを認めざるをえない。この〈日本像〉が、日本近代化の所産、またその近代教育の成果であるならば、それは反省すべき問題となるであろう。それは日本近代化の意図せざる結果であろうか。そのように見られるとは思ひも及ばなかつたと言えるであろうか。そうではない、それはむしろ誇り高き、意図的な教育の結果であつたのである。それは日本近代化の問題として真剣に反省すべきであろう。それは意図的な結果であり、その近代化を指導して理念が、「和魂洋才」の説であつた。したがって、この日本像は、「和魂洋才」的近代化の意図的結果であり、それは、第一の敗戦によって破滅したはずである。ところが、戦後五十年目にして依然としてそれが残っているのである。

3 ハンチントンに対する批判

七、この書が日本で好感をもつて迎えられているという事実は、きわめて異様なことと言わねばならない。学者もジャーナリストも有効な反論ができないでいる。それは、この一撃によってノック・アウトされたボクサーのようである。ハンチントンの〈日本像〉に対する批判は、しかし、両刃の剣、つまり、ハンチントンを批判するだけではなく、このようなイメージを代表する日本の背景についても批判するものでなければならぬ。しかし、まず、昨今のアジア危機を見るならば、ハンチントンの書は、それ自体決定的な反駁を受けているということを指摘して置かねばならない。この本の翻訳がでたのは、昨年（一九九八）の六月であった。アジア危機のさなかである。この危機がハンチントンの所論にとつてどういう意味をもつかを、訳者は知っていた。訳者あとがきで、こう書いた。「ハンチントンの言う『儒教Ⅱイスラム・コネクション』という構図は、東アジアの経済成長に歯止めがかかったことを考えてみると、あるいは修正する必要があるかもしれない」（四九七）。明らかに、ハンチントンの説は、「アジアの奇跡」に依存して立てられたところがある。翻訳者は、そのことを声高には言わなかった。それは「あるいは修正する必要があるかもしれない」と書くが、その修正は、部分的なものでありえない、むしろ、彼の立論の基本にまで及ぶものであるはずである。ハンチントンは、彼の展望を、日本における近代化と西欧化の区別分離ということから開いた。ハンチントンは、「日本は近代化されたが、西欧にならなかつた」（三）という命題をもつて、近代化と西欧化とを切り離す見方を取り出した。この見方は、彼の書にとっては、方法論的また構造的意味をもつものであった。「要するに、近代化はかならずしも西欧化を意味してはいない。非西欧社会は近代化すること

が可能だし、近代化するのに独自の文化を捨てたり、西欧の価値観や制度や生活習慣などをすっかり採用する必要はなかった。むしろ、後者は不可能に近いかもしれない。……それどころか、近代化はそれらの文化を強くし、西欧の相対的な力を弱める。根本的なところでは近代化しながら、非西欧化しているのである」(一一二)。しかし、近代化と西欧化との関係は微妙であって、その切り離しは決して安易になされるものではない。それをハンチントンは、極めて安易に遂行し、それをもって彼の文化多元主義的方法論的道具として用いた。そこに彼の問題がある。

日本近代化における近代化と西欧化の区別によって、ハンチントンは、近代化の内容を、スハルトの開発独裁的なものの可能性として見誤る知的斜視におちいることとなった。これは近代化の浅い理解である。そしてその結果、近代化の世界史的意義を理解できないでしまった。その浅い近代化理解と、彼の文化多元主義とは根底において結びついている。歴史には深層がある。それを見ないで、文化多元主義に陥ることの危険を、ハンチントンの書は改めてあらわに示している。アジア危機において何が起こったのか。それはこの切り離しの日本モデルの崩壊に他ならないのである。日本は、昨年、グローバリゼーションの圧力のもとで、日本のモデルの基本構造である「護送船団方式」を捨て去った。

八、すべての多元主義は、歴史の見方と微妙にかみ合っている。その二十世紀的原型は、トレルチの「文化圏」の考え方である。トレルチは、歴史主義からして文化相対主義に至った。しかし、ハンチントンの文化多元主義は、方法的にもっと粗雑である。彼は「フォルト・ライン」(断層)という概念を用いるが、歴史の深層における断層の生起についてはまったく無感覚である。ハンチントンは、冒頭に引用した日本の孤立性を指摘した文章の中で、「かといって移民先の文化に同化することもない。(たとえば日系アメリカ人がそうだ)」と書いた。これは、第二次大戦中のアメリカの日本移民にたいする偏見と同一ではないか。ペルーには、フジモリ大統領がいるではない

か。アメリカには、フランシス・フクヤマのような思想家もいる。ハンチントンには、このような人の存在をこの判断を下す前に思い起こすこともできなかつたし、また思い起こしても理解出来なかつたであろう。問題は、ハンチントンの眼は、たとえば、フクヤマの歴史的・歴史哲学的視線をもっていないということである。歴史の問題と取り組むには、「歴史哲学」を要求する。それは歴史の深層の動きに着目するからである。

ハンチントンの見方では、この歴史の深層の動きを捉えることができない。彼の発想は、時間的でなく、空間的であり、社会変動的ではなく、文化類型的である。それゆえ、現代世界に起こりつつある変化の真実に触れることがない。変化とは元来歴史的世界の特質である。それを把握できない思想は、欠陥ある思想である。そしてそのような思想がしばしば影響を与えることがあり、歴史形成をゆがめることになる。

九、ハンチントンのこの方法的欠陥が露骨にあらわれたのは、日本の歴史における一九四五年の出来事をまったく見ることなく、それを見過ごしにしたことにおいてである。ハンチントンの視野には、一九四五年の出来事とそれに由来する日本国憲法制定のことが、全く入ってこないということが、われわれのハンチントンに対する根本的疑問と言わねばならない。この点を正確に捉えることなしに、日本の問題を論じることが不可能であろう。この問題が、いわゆる「歴史観」の問題として、昨年もアジアにおける日本の問題であつたことを、ハンチントンは何の気にもかけないようである。日本国憲法の前文には、「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである」と記されている。この規定は、アメリカと日本とを原理的に結合しているのである。なぜこの重要な事実が、ハンチントンの視野から喪失したのか。それは単なる不注意の結果ではない。それが視界から喪失したのは、彼の学問的方法論の欠陥のゆえである。つまり、それ

は、彼の文化多元主義のゆえであって、彼が批判するフクヤマの歴史哲学的視線の意味を理解できない方法論的欠陥によるものである。ハンチントンの文化多元主義は、トレルチにおける歴史意識が希薄となり、類型的な見方が強くなっている。歴史意識が時間における思惟であるならば、文化多元主義の見方は空間の相における思惟である。フクヤマはヘーゲルの影響を受けた。ハンチントンにはそれは微塵もない。そのことが、日本の決定的な歴史の出来事を見ることを不可能ならしめた。ここに、日本の歴史の中に「フォルト・ライン」があらわとなっている。そこで古い日本の地層と新しい日本の地層が断絶して見えているのである。

十、もちろんハンチントンにおけるこの見落としては、日本側からの参与がある。日本のたとえば、自民党の政治家や官僚たちには、一九四五年の出来事に対する真摯な反省と深刻な理解が欠けている。日本の経済復興の奇跡の中で、この敗戦の事実は忘却されて行くのである。この忘却が、ハンチントンの〈日本像〉に寄与していることを認めざるを得ない。しかし、最近の日本モデルの崩壊は、アメリカの学者の浅薄な見方と日本の政治家や官僚、そしてその背後にある日本主義的傾向の、両方を破壊することになるのである。

4 日本の大学の新しい世界史的位置づけ

十一、もし日本の大学が新しい世界史的な位置づけを求めらば、ハンチントンの〈日本像〉を廃棄処分することから始めなければならない。その〈日本像〉に遺憾にもはまりこんだ日本は、彼が描く荒唐無稽な二〇一〇年の世界戦争のシナリオ、南シナ海の油田を巡って中国とヴェトナムの戦争が起こり、ヴェトナムはアメリカに支援を求め、そしてやがて、アメリカ、ヨーロッパ、ロシア、インド対中国、日本、イスラム世界との世界戦争が始ま

る、日本は右往左往する内に結局中国につくことになるらしい。日本は孤立文化だからである。しかし、このゆきづまりは、今日の日本のえも言われぬ閉塞感として実感されていることではないか。それでは、どう展望を開くか、それが今日の大学問題と関わるのである。われわれは、ハンチントンの前提を破壊することから、日本の新しい時代を別様に展望しなければならない。そしてそれとの関係において日本の大学を *reorganize* することが必要である。一九四五年の出来事は、日本史を逆説的ながら、日本を孤立からすくい出し、世界史的關係の中にシンクロナイズした出来事であった。それを確定したのは、日本国憲法の制定である。日本は自覚的に日本国憲法をもつて外国に対面すべきである。それは新しい日本の顔だからである。そしてその顔は世界に通用する顔である。第二次大戦後の世界的出来事に含蓄された客観的意味を、日本の将来に向かつて十分に展開して行くことが、ハンチントンとそれに抱え込まれた戦後日本を克服していくこととなるであろう。ハンチントンというハーヴァード大学教授を論駁することは、日本の知性の自立を意味するであろう。その自立は日本国憲法によつて支えられる。日本において必要なことは、このような浅薄な観察に対して、世界史に対する深い洞察をもつことである。その深い洞察は、何よりもまず自己批判における深い切り込みをもつものでなければならぬ。

十二、われわれは、新しい日本をどう構想するか、という問題に戻らなければならない。第一に、敗戦の現実を受け入れること。第二に、コンヴァージョンという精神的課題。第三に、その文化的意味、これら三つの問題について考察してみることにしたい。まず第一の点であるが、年末のテレビ番組で、日高義樹リポートがあつたが、その中で、ドイツのシュミット元首相が、橋本前首相がいつまでも領土問題に固執していることをやや嘲笑的な調子で取り上げ、ドイツは比較にならない程の領土を失つた、しかし、それは敗戦の現実だ、それを受け入れることから出発して今日の新しいドイツを築いたということを語っていた。領土問題が、外国にどのように映るのかという

ことを、このエピソードは語っている。これは、いわゆる「歴史観」の問題と関係しているのである。ドイツの対応と比較される。これは誠実さの問題に関わるであろう。いずれにせよ、ドイツと比べて、日本は、別の意味で孤立している。ヨーロッパでそのようなことがない。だから今年から通貨統合も可能であった。日本は「歴史観」問題の処理を怠ったことにより、それは日本の永久の重荷となり出した。中国がそれを逆手に取り出したからである。日本は永久に詫びることを強いられる倫理的弱者となった。それによって将来の中国のヘゲモニーに屈することになるであろう。それは日本国民の世紀末の失敗であった。

十三、第二は、日本精神の課題としての魂のコンヴァージョンということを実際に考えることが必要である。日本が新しい時代を切り開く原点は何か。それは、外面的復興によってもたらされない。内面的変革によって与えられる。外面的復興によって、内面的変革を代理させることはできない。たまたま「心の教育」ということが問題になった。内面とは心の領域である。あるいは、もっと宗教的に言えば「魂」の領域である。否定的なものを受容する、それが魂の強さとなる。悔い改めない傲慢さは、かえって精神の弱さをあらわす。敗戦の事実、日本にとつて決して外面の敗北ではなかったはずである。それは内面の破滅であったはずである。それを外面の敗北としたことに虚偽があった。昨今、内面からあらたな時代を切り開くという、日本史上かつてない重い課題を背負わせられているという所感をもつ。それは深く政治的課題であったはずである。ところが、それを浅く経済的課題とした。そして経済一流、政治三流という、魂の貧しい、物質には豊かな日本が出来上がった。日本のアンデンティティとは何か。古いアンデンティティと新しいアンデンティティとがある。今問題になるのは、新しいアンデンティティである。対外関係においていかなるアンデンティティをもつか。端的に言えば、国家がそれによって立つ原理である。それは憲法である。新しい日本国憲法は、敗戦の現実の肯定を意味する。しかし、そのことによって、日本は

国際関係における地位を明確化して来たのである。それに立つという単純な自己決定が必要である。しかし、この自己決定が、日本の文化にとっては、内面的変化を惹き起こすのであり、そこで、新しい心の問題にぶつかる。もし宗教的用語を用いるならば、「回心」(コンヴァージョン)の必要という問題である。

十四、第三は、コンヴァージョンの文化的意味である。キリスト教文化とは、内的には高度な緊張をもった概念である。H・リチャード・ニーバーは、キリストと文化の関係を論じて、コンヴァージョンニストという関係を設定した。それは、ヨーロッパのキリスト教世界を形成した。日本がキリスト教を拒否したのは、和魂洋才の理念をもつて近代文化を形成しようとしたからである。和魂洋才という文化政策は、日本の伝統主義の保存に利用された。日本は、外来のよいものに対して否定的ではない。仏教受容がそれを示す。カトリック受容もそれを示す。その開かれた精神態度は、和魂洋才という政策によって閉塞された。ハンチントンが、日本の孤立性について、「日本の孤立の度がさらに高まるのは、日本文化は高度に排他的で、広く支持される可能性のある宗教(キリスト教やイスラム教)やイデオロギー(自由主義や共産主義)をとまなわないという事実からであり、そのような宗教やイデオロギーをもたないために、他の社会にそれを伝えてその社会のひとつと文化的な関係を築くことができないのである」(二〇四)と言ったが、これは、和魂洋才のもたらした国家的損失をあらわしている。

キリスト教をもつことは、単に交わりの絆をもつだけではない。それは古いキリスト教文明に対する理解とまた批判の基準をもつことにもなる。これが大学院にアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科を設置した理由である。

5 現代における大学形成の方向

十五、右手に聖書・左手に日本国憲法——聖学院大学に人間の態度を、ジョン・リルバーンの模範にならない、それを新しく言い表すとすれば、リルバーンが右手に聖書、左手にクックの「法学綱要」をもってデモクラシーのために戦ったが、聖学院大学の人間は、右手に聖書、左手に憲法をもってデモクラシーのために働く。日本が、そのようなものとして独自であるならば、それは、世界に対して、特別の意味をもつ。それは、日本のような破滅を経験することなく、平和裡にその課題をどう遂行するかということである。それは、まさに平和の使者となることである。日本国憲法が聖書と現実の間の中間公理となる。人間福祉学科を基礎付けるために日本国憲法を用いたのは、日本国憲法によって、日本は新しい国家目標をもち得たからである。富国強兵から富国福祉への転換である。

十六、宇魂和才という文化生成の嚮導理念をもつこと——和魂洋才は不当に五十年生き延びた。それは今度のグローバル化の波のもとで終わる。新しい時代が日本ではいつも遅ればせにやってくる。和魂洋才に代わる文化形成の嚮導理念が必要である。宇魂とは何か。それは、多元的文化を平和裡に共存せしめ、また文化多元論をサポートではなく、ダイナミックに生かすような基盤となる精神である。それは具体的にはトレレーションを支える精神の共通基盤であり、エキユメニカルなスピリットである。それは生き生きとした強い精神である。それは、疲労困憊した虚弱な精神ではない。それは精神的な競争社会である。審議会の『中間まとめ』によれば、「競争的環境の中で個性が輝く大学」という「競争的環境の中に」立つことである。そのためには、公平の原則が必要である。偏見の排除が必要である。和才とは何か。よりよいものを探り入れる才である。そこに倫理問題がある。想像

力だけではない。選択力が問われる。それが宇魂和才の人間である。今日の日本の大学は、日本の将来の在り方に
関わるべきスタンスをとることが緊急の課題となる。

十七、新しい私学のリーダー——明治の私学の創設者福沢諭吉は、尊敬に値する人物である。しかし、今日の私
学の指導者は、「洗礼を受けた福沢諭吉」を期待すべきであろう。植村正久は、福沢諭吉を尊敬したが、他方辛辣
な批評をした。福沢諭吉は、ちよんまげを結ったベンジャミン・フランクリンだ、と評した。今日必要なのは、洗
礼を受けた福沢諭吉である。天は人の上に人をつくらず、というが、その「天」をもつとはつきりと捉えることが
なければならぬ。模造品ではだめだ、本物でなければならぬ。

十八、大西洋と太平洋を渡るキリスト教文化の架け橋——この文化的課題を聖学院大学は担うことになる。イギ
リスとアメリカの間には大西洋をまたぐキリスト教文化の架け橋があるが、それをさらに太平洋を越えて、アメリ
カと日本、そして韓国へと結ぶキリスト教文化の架け橋を造ること、これが新しい日本における新しい大学の課題
となる。これがアメリカ・ヨーロッパ文化学研究科の設立の背後にある理想である。それは、近代化を深みにおい
て推進することである。その際、一番問題になるのは、基礎構造をマルクス主義的社會主義において市場經濟を推
進する中国の行方であろう。それが成功すれば、新しい中国一國のモデルができるであろう。そのような中で、日
本がデモクラシーの國として信頼のおける國となることが重要である。韓国の金大中大統領は、この点で鮮明な認
識をもっている。残念ながら、日本にはこの種のリーダーシップが欠けている。そこに和魂洋才の余弊がある。

十九、自由の問題——近代化の進行は、自由の問題を惹き起こす。近代化の広まりの周辺には健康な生命が見え
るとしても、その中心部分には空洞化と腐敗とがおこる。それはヨーロッパやアメリカの古いキリスト教社會の中
に見いだされ、その影響が情報化の波に乗って世界的に広まる。その中であって、大学の課題は、その自由の問題

との取組となるであろう。大学に見いだされ、社会における大学の知的課題は、自由の問題である。和才は選抜力として倫理性と結びつく。新しい知の創造だけではない、知の新しい用い方が必要となる。「主を畏れることは知恵の初め」(旧約聖書 箴言一・七)、「ピエタス・エト・スキエンチア」、この順序が必要である。この「真理が自由を得させる」からである。この真理と自由の秩序は逆転されない。これが新しい時代における新しい大学の中の認識である。

(聖学院大学・女子聖学院短期大学新年教職員研修会での講演原稿)

(一九九九年一月八日)